

姫ギルに転生しましたが、どうやらFate世界では無いようです。

Shohei Hayase

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

前世はフリーター、今生は姫ギル！

いや、なんでだ!?

神様に会わず、魔術のマの字もない世界に転生した男は、綺羅星の如く輝く少女に出会い、その運命を大きく変える。

……ところでアイさん、その手に隠し持ったナイフは一体何なのかな？ ハハハ。

目次

ハッハー！ 転生したぞ！ ……いやマジで？	1
嘘つきアイちゃん	5
アイドル？ え、俺が？	9
たったひとつの小さなやらかし	13
やっちゃった…	17
自省と予想、それと魔改造	22
堅き決心、それと抑止力	26
※初戦闘です	30

ハッハー！ 転生したぞ！ ……いやマジで？

転生、とは何だろうか。

仏教あるいはヒンドゥー教に存在するこの概念だが、大体は自分が自分であるという意識を持たぬままに転生する。

自分は転生を信じるかどうか…という点については、実証主義的観点から否定的だった。

だってそうだろう？ 誰だって前世の記憶を覚えている者はいない。よしんば前世の記憶というものがあって、その予言なり何なりが当たったとしても、それが偶然であるか本物の前世の記憶であるかを検証する術はない。

無論ないことを完全に証明するのは極めて難しいが…少なくとも極一般の人間にそのようなことが起きるとは思えないのも、また事実だ。

…ここまで語っておいてあれだが、俺はどうやら輪廻転生というのを体験してしまったらしい。体験してしまった以上は、この世に輪廻転生というものが存在することを認めざるを得ない。

……が、しかし。

しかしだ。

(転生先が女で姫ギルってどうすりゃいいんだゴルア…ツツ!!)

転生したというのに会った記憶の欠片もない神様とやらに、俺は心からの罵倒を捧げた。



えーと、俺は25歳のフリーター、名前は…駄目だ、出てこない。どうやら前世最後の記憶…今どき流行りもしない全自動転生トラック轢殺機にヤラれる以前の記憶は、綺麗サツパリ無くなっているようだ。

んで翻ってマイボデイ。年の頃は5〜6歳だが将来有望な美少女。金髪赤目というどっからどうみても忌み子染みた色合いの割に、施設では苛められる事もなく悠々自適な日々を過ごしている。

……そう、施設。施設なのだ。

どうやらこんな面構えの俺を生んだせいで、父母は相当に争つたらしい。母は父に不貞を疑われて離婚、その原因の俺を愛せるわけもなく、かと言ってお腹を痛めて生んだ子に親としての矜持を捨てられるわけでもなく……妥協案として、俺は施設に預けられた。

(ごめんなさいね、中身こんなだつて知られたら今度こそ殺されそうだから言えないけど)

まあ路頭に迷うよりはマシだから、感謝はしている。

それが1つ。もう1つは、俺が下げているネックレス。

王律鍵バヴール。Fateという作品の「ギルガメッシュ」というキャラクターが持っている……なんか凄いやつ、で、それに触れた瞬間出るわかる知識の渦がゴチャゴチャと。それがコイツの能力だから、仕方のないのだが。

この鍵が開くのは、ギルガメッシュの宝具たる王の財宝。ゲート・オブ・バビロンその能力は、簡単に言うとその世の全てが収まった四次元ポケット。

これ持つてて女性の金髪赤目、それはもう姫ギルしかないだろう……と言う訳です。

施設の個室で試してみたが、本当に何でも出てくる。剣、槍、銃、金、聖杯などなど……ざっと思いついただけでもジャラジャラ山のように出てくる。乖離剣ナンチャラ君も取り出せし、これはほぼ確定と言っているのでは？

「というか、こんなことになるつてのが訳わからんな……ここは現代日本なんだぞ？」

口を開けば、やや低めだが確かに少女とわかる甲高い声。ギルガメッシュの口調じゃなくてよかった。あんなのが現実に居たら爆笑必至だ。

Fate世界よろしく魔術なんてものはこの世界に存在しない。

ただ俺だけ、ただ俺という異物が、この世界に存在している。

「何故だ？ 何故こんなことになっている？」

記憶はない。しかし知識はある。この体と、英霊ギルガメッシュが所持する能力、宝具についての知識と、前世で25年生きて培ってき

た知識が。

……とは言え。

「何をすれば良いのやら……いや、金か。世の中結局金だもんな」
王の財宝から貴金属や宝石類を取り出す。

子供の拳ほどの大きさがあるダイヤモンドが10個程出てきたので慌てて元の場所に戻した。

(売れるかあんなのーっ!!)

世界最大のダイヤモンド原石であるカリナンが重さ620g、先程のダイヤはカット済みで630g。もうアホかと。

こんな王室に寄贈するレベルのものを個人で売買するほど怖いことはない……というか確実に突っ込まれる。

(小さな宝石は……無いか。というかカット後300g以上の宝石しか出てこねえ。世界でデカイ宝石が見つからない理由が分かった気がするぞ)

この宝物庫の持ち主であるギルガメッシュという男……いやキラか？ は、とにかく面倒な性格をしている。

面倒……うん面倒だな。ギルガメッシュ視点での慈悲だろうと人を殺すのは倫理的に駄目だ。それは俺の思想として一貫している。

それが出来てしまうのがギルガメッシュだ。この上なく人の我欲を煮詰めたような男で、だからこそ質が悪い。

(俺は普通だ。ギルガメッシュとは違う。俺は法に則り倫理を良しとする。それが最優先事項だ)

それがこの世界に生きる者としての、そして今を生きる現代人としての矜持。

バヴールイルの取っ手を捻り、今外に出ているものの全てを仕舞う。知識として残ってはいるが、やはり実際に施設を見て回るのも必要

だろう。そう考えて、個室の扉を開ける。

あらかたの設備を見て回って、玄関に向かう。

見ると、施設の職員に連れられて、一人の少女がこちらに向かってくる。

なんの気無しに廊下からそれを眺めていると、眼の前の少女が数度

ブレるかのような違和感に襲われる。

「……千里眼、か？」

そう言つて、すぐさま否定する。千里眼は未来を見るもので、観察対象がブレるようなものではない。これはどちらかと言うと……

(シヤ・ナク・パ・イルム 全知なるや全能の星？ これも宝具の1つつてことか)

幾重に重ねられた欺瞞さえも一瞬で見通し、真実を開帳するギルガメッシュの宝具。

宝具が反応するほどの何かがこの少女にある、と理解した俺は、上がり框のギリギリまで歩みを進め、彼女が玄関の扉をくぐるのを待った。

「あら、こんにちは。今日からこの施設で生活することになった星野アイさんよ。ほらアイさん、挨拶して」

施設の職員が、彼女の名を呼ぶ。

「星野アイです、よろしくお願ひします！」

可愛らしく微笑み、お辞儀をする少女、だが宝具が勝手に起動し、彼女の隠された真実を暴き出す。

《 見なければそれは無と変わらない ……見たな？ 》

……何も無い。あれ程までに見目よく挨拶してみせた彼女だが、その心の裏には、果てしない「無」が広がっていた。

嘘つきアイちゃん

衝撃的な少女……星野アイとの邂逅は、出会った日は挨拶を交わしただけだった。しかし俺は彼女に気に入られたのかどうなのか……頻繁にアイに絡まれるようになった。

「ねえねえ玲奈ちゃん、プリント見せて？」

「アイ、昨日渡された筈の物をどこにやったの……？」

おっと、自己紹介がまだだった。金城玲奈かなしろれなというのが、今生における俺の名前だ。前世の記憶は一部が消え去って名無しの権兵衛状態なので、自己認識としては問題なく玲奈と俺が同一人物だと認識できている。

アイにプリントをせがまれ、手元にあつたプリントをアイに渡す。彼女はニコリと笑ってから両手を合わせ、先生の方に向き直る。

俺の方はプリントが無くても問題ない。この体のスペックが尋常じゃなく高いせいで、半ば完全記憶染みた力を以て頭の中にプリントを再現できるのだ。

そして身体能力も当然ながら化け物。今の状態でも、あらゆる競技において世界記録を塗り替える程度の身体能力が見込めるだろう。

……だが、正直に言おう、弱すぎる。

Fate世界におけるサーヴァントというのは、大なり小なり差はあれど、高い身体能力を持っている。ギルガメッシュもサーヴァントである以上、たかが世界記録程度超えて当然なのだ。

導き出した結論は、俺を絶句させるに足るものだった。

この体は英霊ギルガメッシュを再現したものだ。だが、完全ではない。そもそも原典での設定では魔力体で本人の魂の一部を切り取った使い魔の状態なのだ。特殊な方法を用いて受肉するか、現世に留める楔であるマスターが居なければ、魔力に分解されて消滅してしまう。

ならば、実際に肉体を保つてこの世界に存在する俺は、一体何なのか？

答えは簡単、英霊ギルガメッシュの生前の肉体。俺の魂が入ってい

る体は、それが元になっている。

まあ、つまり『成長する余地が残っている、だから今は弱い』ということだ。

……それはさておいて。

肉体は弱くても、頭の方は変わらない。むしろこの体を得たことで、知的能力、認知能力は更に向上している。

とある哲学者の言葉を借りれば、「知は力なり」と言った所か。

前世ではフリーターまで身を落としたが、大学は出たのだ。記憶は吹っ飛んだが、エピソード記憶が消えただけで、その他の記憶は支障なく残っている。

なので小学校の授業など、退屈過ぎて欠伸が出るくらいだ。施設の本棚にある大学受験用の参考書を記憶領域に展開することで暇潰しをしているが、遠からずそれも読み尽くすことになるだろう。そうすれば……

(本格的に暇が到来する……!!)

だがまあ、取らぬ狸のなんとやらという言葉もあることだし、一旦その未来予測を棚上げにする。

テストが返却される。俺は当然ながら100点、アイは……40点。

(……低すぎないか?)

小学校のテストは6、7割を超えて当たり前、という認識が俺の中にはある。高得点をつけてやる気を出させないと、勉強を嫌いになってしまうからだ。精神的に発達していない小学生の勉強のモチベーションは、他人に褒められることにある。そして、高得点であればあるほど他人から褒められやすい。

(どうにかしてアイに勉強を覚えさせないと……この後が困るだろう)

知り合ってから数ヶ月経って、友達と言える程度には会話を重ねてきたのだ。

アイは決して頭の回転が悪いわけではないのだが……彼女の頭の良さは勉強とは別のベクトルに向いているようだ。

先程も述べたが、「知は力」なのだ。もっと雑に言えば、「芸は身を助く」。身に付けたものが人生をひっくり返す起点になることもある。

無論それを実感できる環境にあるかどうかとは別の話だが、学べるのだったら学んでおいたほうが良い、というのはある種の一般論だろう。

「アイ、ちょっと見せて?」

テスト用紙を覗き込み、どこが間違っているのかを確認する。

(意見を記述する問題は全滅、漢字問題も正答率が低いな……けど) 登場人物の心情を述べる問題……これは全問正解していた。

(人間観察……そしてそれを自己に反映する能力、彼女の強みはそれか)

明確な得意不得意があるだけ良い。全てが平等に壊滅的であるよりはマシだ。

「えっと、あはは……」

「良かったら私、教えようか?」

「え、いいの?」

頬を掻くアイに提案する。

「もちろん。友達なんだし、遠慮なく頼ってよ」

勉強大事、超大事。

その念が伝わったのかは定かではないが、アイは数瞬迷ったような表情を見せながらも、軽く頷いた。

「わかった、それならお願いしようかな?」

姿がブレる。

《面倒だけど、友達だしなあ……》

(……うん、まあ分かってるよ。お節介もいいところだろうな) シヤ・ナク・パ・イルム 全知なるや全能の星が自動で発動し、彼女の隠された本心を暴き出す。

まあ、嫌われないだけマシか。傷ついてはない、いないぞ……

「それなら、早速勉強しようか。一緒の部屋に行っていないかい?」

「うん、いいよー」

これは本心。それに内心安堵しつつ、記憶を引っ張り起こす。

英雄王スペックの頭脳は他人の教師役にはとても向いていないが、それは俺の経験から補正する。

3年で小学校の基礎力を固め、応用は義務教育のみならず高校大学の範囲まで網羅したパーフェクトなブートキャンプをご覧に入れよう。

アイに実施した勉強会の効果は覷面で、みるみる内にアイは成績を伸ばし、俺の得点と肩を並べるまでに成長した。

(応用まで行けなかったのが個人的には残念だが……仕方ないか。本来なら必要ない部分だからな)

元々のアイの地頭あつてのこととはいえ、学年が上がるとやることが段違いに難しくなる。応用は早計だったと自省し、その計画は頭の中に仕舞っておく。

そんなことを続けているうちに、俺たちは小学校を卒業し、中学校に進学していた。

アイドル？ え、俺が？

中学生になった……とは言ったが、大して何かが変わるものではない。

強いて言うなら、働けるようになった。学業をさほど苦にしているないので、それが一番大きい。

……というわけで、お小遣いから出した一万円を元手に、FX取引で100万円まで増やしてみた。

働けて？

うんまあ、正直その通りだ。認めよう。俺は今すごい楽をしている。

それもこれもギルガメッシュの持つ能力のせいだ。

人生にどれだけ金がついて回るか……それを表したスキル「黄金律」、ギルガメッシュのランクはAランク。一生金には困らないとされるこの能力はもはや呪いに近い。

それに未来を視る千里眼と合わせれば、ぽこじやかお金が増える。どの時点で売れば最も金が増えるのかわかっているので、限界までレバレッジを効かせても全く問題がない。

王の財宝に収蔵している宝石類はともでは無いが売れたもんじやないので、地道にコツコツ稼ぐ必要があるのだが……中学生がバイトで稼げる賃金なぞたかが知れている。

俺の当座の目標としては、大学へ進学すること、18になったら施設を出なければいけないので、それからの費用が必要になる。

さらに今生ではアイの面倒も見る必要がある。さすがにあそこまで勉強を叩き込んでおいてポイントと放り出すのは人の心が無い。

こちらがあまり時間を取らずに大量に稼げるやり方となると、俺の頭ではFX取引くらいしか思い付かなかったのだ。

本当に本当の最終手段で、頭にヤの付く自営業をぶっ飛ばしてカツアゲするというのもあったのだが、お礼参りが怖くてやめた。

……それはさておいて。

先日、二人で街を歩いていたら、金髪を短く切りそろえた髭面の男

に声を掛けられた。

チャラ男かヤクザの回し者にも見えたが、サングラス越しの瞳はやけに誠実で、話だけは聞いてやろうということになった。

「苺プロダクション……？」

差し出された名刺には、『苺プロダクション代表取締役 斎藤壹護』と書かれている。

(聞かない名前だな。隠れ大手……って訳じゃない)

本物の弱小プロダクションのようだ……失礼な言い方だが。

頼んだコーラフrootには口を付けず、男の言葉を待った。

「ああ。君たち二人に、お願いがある。……アイドルに、なってみないか？」

「アイドル？」

アイドルというと、アレか。歌って踊って握手会したりライブしたりするアレか。

ゾワツと体中に鳥肌が立つ。前世と合算して40近い男がそんな振る舞いをする想像に俺の精神が悲鳴を上げる。

だが落ち着け、落ち着け俺。

「……なぜ私達なのですか？」

気取られないように慎重に、されど十分に驚愕の心持ちを残したまま、俺は斎藤社長の言葉を待った。

「君たち二人は原石だ。磨けば光る。……そう感じたからだ」

正直に答えた斎藤社長に好感度を少し上げて、ちらりとアイの横顔を盗み見る。

身長こそ小柄だが、大人びた顔立ちのアイは確かにアイドルとして十分通用するであろう見た目をしている。

だが二人？ 二人と言ったか社長さん。

「私も……ですか？」

「え、玲奈はアイドルにならないの？」

自分の姿の評価としては、ルックスはまあまあ、身長はデカイ、仏頂面のトリプルコンボをキメているので、そもそも俺がアイドルになれるのかという点から疑問に思っている。

そしてなぜアイはそんなに意外そうな顔をするのか、コレガワカラナイ。

「ならないよ。私はアイドルには向いてないし……アイはどう？」

彼女は視線を落とし、ポツリポツリと言葉を零す。

「……私は、愛がわからないの。子供の頃は愛が全てだった。お母さんを愛すれば、お母さんは私を愛してくれた。けどある時に裏切られて、それから私は、愛という感情をまるで信じられない」

それは、今まで誰にも話した事のない、彼女の過去の話。

「私は嘘つきだよ。居場所を求めて、自分にも、他人にも嘘を吐いてきた。そんな自分が、誰かを愛せる訳がない。私も、アイドルには向いてないよ」

暫しの沈黙は、社長の声によって破られた。

「……アイドルになれば、『愛してる』って言葉は山程言う。だが、嘘でも良いんだ。アイドルは上辺を整えるモノだ。裏がどうなっているかがファンは興味を持たない。それはアイドルに求められない。それに……」

一度言葉を切る。彼の瞳は、アイを真っ直ぐに射抜いていた。

「嘘から出た真、という言葉もある。お前が「愛」を伝え続けることで、それが本当になることもあるかも知れない」

社長は淀みなくそう言い切り、アイは大きく体を仰け反らせて伸びをする。

「……アイドルになれば、私は「愛」を知れるのかな」

「気の持ちようだ。愛は求めるものじゃない。自分から与えるものだ。それが分かっているんなら、案外直ぐかもな」

社長の答えは素っ気ない物だったが、アイにはそれで十分なようだった。

「分かったよ。私、アイドルになる」

「そうか。……君はどうするんだ？」

社長が私に視線を移す。

（んー……アイがアイドルになるっていうんなら、メンタルケア的にも俺が近くに居たほうが良いか？ 流石に芸能界の経験はないから、

前世知識含めても手探りになる。一度体験しておくのも悪くはない。ただ……)

アイドルだけは嫌だ。

頭の中で様々な思考を巡らしつつも、その点だけは一致していた。「アイドルではなく……ファッションモデルはどうでしょうか。それでしたら、私も芸能界に入ろうと思います」

「モデルか……。確かにウチはモデルの仕事も多いが、君は正直、モデルとしての極めて高いポテンシャルがある。それだったら、ウチじゃなくて大手のスカウトを受けたほうが良い」

私の提案に、社長は渋面を作る。

……というか、言っていることがよくわからない。

「???」つまり、私はアイドルじゃなくて、モデルのほうが向いている、と?」

「俺達で作るアイドルグループ……『B小町』は全員がカワイイ系のメンバーだからな。君は口直し……というか、カワイイの中にクールを置くことで双方がより魅力的に引き立つというか……そんな感じで考えていたんだ」

成程、社長さんの中では、俺はアイドルよりモデルの適性がありそうだけど、アイ達をより引き立たせる為にはアイドルとして使ったほうが利益になる、と判断したのか。

確かに、アイドルとしてデビューしたあとにモデルになった例は数多いが、反対にモデルからアイドルになった例というのはどちらかといえば希少なように思える。

それなら最初からアイドルとして育てる方が、経営判断としては正しいのだろう。

「それでも、私はアイと一緒に良いんです。ぜひ私をファッションモデルとして採用してください。どんな仕事でも引き受けます」

風呂に沈められるのだけは勘弁だけどな!!

たったひとつの小さなやらかし

頭をテーブルと並行にしてお願ひすることで、俺はどうかファッションモデルとして社長の芸能プロダクション……苺プロダクションに所属することになった。

基礎的なウォーキングやポージングの技術はレッスンの講師から一回で学び取り、ポージングのバリエーションは苺プロダクションに置かれているファッション雑誌100冊弱を完全記憶して自身のポーズとして取り込んだ。

アイは筋こそいいのだが覚える速度は常人並みか少し良いくらいなので、レッスンの費用も時間もアイに向ける方が合理的だ。普段あまり使わない英雄王スベックを用いて無理やり訓練を終わらせたのには、そういった思惑もある。

とはいえ結果は上々で、社長からも一発で太鼓判を押され、初仕事としてファッション雑誌のモデルとしての仕事を貰った。

「苺プロダクションの金城レナです。よろしくお願ひ致します」

挨拶をしてヘアスタイリストの元に向かい、ヘアメイクをしてもらう。男の髪というのもあって手入れはそれなりに雑なのだが、そこは英雄王ボディ。キューティクルが剥がれることもなく完璧な状態を保っていて、担当者には随分と驚かれた。

ワックスをつけて貰って、少し髪にボリュームを持たせる程度でヘアメイクは終了し、用意してもらった服に袖を通す。

（ガリーナ、と言うよりは中性的だな。フリフリの衣装じゃないだけマシか）

さほど勞せずに着替えを終えて、スタジオの一部を仕切られたパーテイションから出る。

苺プロダクションはファッションモデルに強く、この仕事も社長が無理をしてオーディション無しのコネ人事で取ってきてくれた物だ。

下手な結果は出せない。

そして、それが契約である以上、100%以上の完成度を出さなければいずれ契約は切られる。

夢のない話だけだね。3Kキツイ、汚い、危険職場以外の非正規雇用だと、求められた通りの仕事をするのは2流、求められた以上の仕事をするのが1流という世界なのだ。

黙っていても金が入ってくるなんて甘い考えなのさ。

故に求められるのは完璧以上の仕事。そしてそれを達成するだけのスペックをこの体は備えている。

ハウススタジオの一角、小物類が設えられたスペースに立って、ポーズを取る。

カメラマンの気分を損ねないように、だが未来視の千里眼を用いて全力でカンニングしつつ『最も良い結果が得られる未来』を選び取る。

……本来なら、ここで止めるべきだった。

ブレーキ役となるべき社長は、アイのトレーニングに付き合っていて不在、そして何より、俺自身が「英霊ギルガメッシュ」の能力について無自覚だった。

まあ、あれだ。何が起きたかというと……

ついうっかり、出来心で、スタジオにいる全員をカリスマで洗脳しちゃった☆

……何言っただ、と思われるかも知れないが、残念ながらこれが事実である。

英霊ギルガメッシュは、スキル「カリスマ」をA+という高ランクで保有している。かつて人類じんるいはんと版図がまだ小さかった頃とはいえ、この世の全てを治めた英雄王であるという事実が、ギルガメッシュを究極の王足らしめる。

能力の説明にはただ一言。《ここまで行くと最早魔力、呪いの類》。

……ああそうだよ、加減せずにカリスマ全開にしちゃったよ！

内容こそ覚えていたが、ここまでの物だとは正直考えていなかった。洗脳というかミーム汚染というか……それよりもっと悪質なものだ。絶対遵守のギアスみたいなのが制約無しで無限に使えるみたいな感じ。

悪逆皇帝よろしく『貴様達は死ぬ！』とか言ったら本当に死にかねないような状態だったので、早急に元に戻す必要を感じた。

それとなく、監視カメラに気を付けながら全員が飲む飲料水に洗脳解除の秘薬を混ぜておいたが……アフターケアは万全とは言い難い。そもそも外部の人間が多すぎてどこの誰が誰なのかが判別できなかったのだ。

(これテレビじゃなくて良かったああ……テレビ放映されてたらマジで取り返しがつかなくなってたんじゃないか?)

カリスマの適用範囲はまだ分からなかったが、少なくとも俺と顔すら合わせなかった数人が洗脳されている時点で、画面越しでもカリスマの効果は適用されるようだ。全国ネットにこんなモノが映ろうものなら……

(危ねえ……日本崩壊の引き金を引くところだった)

カリスマの洗脳を解いて撮影監督と話をした所、ポーズ自体は問題ないようだったので、今度はカリスマの出力を半分程度に抑えて同じポーズで写真を撮ってもらった。元の写真はうっかりを装って消去しておいた。

まあ、その程度でどうにかなるなんて見通しは、ちゃんちゃらおかしかった訳だが。

A+ランクを半分にしたところでAランクのカリスマ……: 具体的に持っている奴の偉業を上げると、紀元前数百年前にも関わらずアフロ・ユーラシア大陸の6%を領土にしたスーパー征服王レベルの魅力を持っていることには変わりない。

そして、写真となってもなお残り続ける呪い……: カリスマの残り香は、世間にとんでもない影響を与えていた。

「ん……: 電話?」

仕事を終えてから暫く経って、雑誌の発売日の朝。枕元で鳴り響く携帯電話を寝ぼけた意識のまま探り当て、通話ボタンを押して耳に当てる。

『ああ金城か! 起きてて助かった!』

血相を変えた社長の声に、俺の顔からさっと血の気が引くのを自ら感じ取る。

(なんだ、あの社長が朝から電話してくるなんて余程のことだぞ!?)

まさか、何かミスが!? それともカリスマ洗脳がバレた? どつちにしろ今すぐ謝らないと。完璧な仕事をやり遂げられなかった私の責任だ!」

思考は一瞬。

「すみません、私の至らなさで社長には大変ご迷惑をおかけしました! 今後はよりモデルとしての研鑽に努め、十分に撮影者の意見を反映しつつより魅力を引き出すアプローチを……!」

頭の中で文を捏ねくり回し社長に伝える。電話越しとはいえ誠意を見せるために何度も頭を下げてパーフェクトな謝罪の構えを作る。

『ちよつと待て! 何だか分からないが君の想像とは多分逆だ! 雑誌は売れた! 大成功だ! 今後のことを話したい。今すぐ事務所に来てくれ!』

だから、社長の言葉は俺の想定我真逆を行くもので……

「——へっ?」

思わず俺は、そんな間抜けな声を出してしまうのだった。

やつちやつた……

「店頭出荷分の20万部は即完売、売上予想は予約分だけで50万部、潜在需要を含めた編集部の予測では累計100万部もあり得るとの事だ。今は輪転機を全力で回してはいるが……」

嬉しさ半分困惑半分といった表情で、社長がホワイトボードをペンで叩く。

「何というか……すごい売れましたね」

今回俺が出させて貰ったのは中堅少し上くらいのファッション雑誌で、売上は月間10万部程度。

社長の話では、雑誌の編集長が俺の写真を見たときに『これは行ける』と思ってくれたらしく、本来なら初版で用意するべきでは無い部数を刷ってくれたが……それでも尚足りなかったのだとか。

「おう。ところで金城」

社長は神妙な顔をして俺の名前を呼び、

「……1つだけ聞きたいんだが、コレじゃ無いよな？」

そう言って彼は頬を指でなぞった。

「いやいやいや違いますってそのような事はございません」

頭にヤの付く自営業と一緒にされては困る。反社会的勢力と関わったことなど一度もない。

猛然と否定することによって、どうにか社長は俺を疑うのを止めてくれた。

「あんまりにも売れるもんだから、てっきりサクラでも使ったのかと思ってるな……まあ、思い違いならそれで良いんだ」

見た目的にはあんたの方がそれらしいぞグラサンパツキン野郎。

……まあ、ただの逆恨みか。やめやめ。

普通に考えたらおかしいもんな。ぽっと出のファッションモデルが雑誌を20万部売った……って、どこのラノベか悪徳芸能事務所の勧誘かって話。

「さて、それで今後の活動について話をしたいんだが……」

「はい社長！ 玲奈をアイドルにするのはどうでしょうか！」

微妙な空気は社長の一言によって払拭されたが、それすらも今まで一言も喋らなかつたアイの提案によって打ち崩された。

「待ってアイ。社長も頷かないで？　っていうかレッスンはどうしたの？」

「今日はお休みー」

俺のジト目を意にも介さず、アイは大きく伸びをする。

「流石さすがに根を詰めすぎたからな。アイは休養日だ」

「わかりました。……いやアイドルになるのを認めた訳じゃないですからね？」

そう釘を差しておくが、果たしてどこまで持つのやら。

「んで、今後の活動についてだが……どんな服を着たいのかと、テレビとかに出る意思はあるのか、この2つだな」

社長の言葉に、視線を落とす。

「出来れば中性的な服を着たいのと……テレビに出るのはいいですけど、露骨なセクハラとかそういうのは辞めてほしいなって……その位ですかね」

「だいぶアバウトだな……もつと突っ込んだ条件を付けられるかと思っただが」

「社長は私を何だと思ってるんですか？」

何というか、社長の言葉遣いからはだんだんと遠慮が取れていつているように思える。変に怯えられるよりはいいし、悪い気分ではない。それだけ俺に心を開いてくれていると言うことなのだろう。

「一度成功すれば、どんな人間であろうと天狗になる。自分に価値があると気付くからな。そのテストも兼ねてだ。ぶっちゃけて言えば、ここまで有名になった時点で仕事は相当選り好みできる」

「ああ、その一回の味が忘れられなくて駄目になるやつですね。分かりました、気を付けます」

俺は前世の年齢分の積み重ねがあるからまだ良いが、本来ならまだ進学したばかりの中学1年生なのだ。ここまで大きな成功体験は後の人生に強烈な影響を残すだろう。

「なら、金城は問題無いな」

「はい。大丈夫です。アイの調子はどうですか？」

幾ら英雄王スペックで特訓に掛かる時間が短縮できるとはいえ、何かと並行して行えるわけではない。俺が学習している間はアイを放ったらかしにしてしまった為、その間の進捗も確認しておきたかった。

「アイはあと1……いや2週間で仕上がる。デビューライブの場所も抑えた。流星の学習速度だ」

「それは……凄いですね」

正直、あと一ヶ月は掛かるかと思っていたが、俺の予想を超えて来たことに偽らざる驚きの言葉が漏れる。

未経験の状態からアイドルとして振る舞えるまで自らを鍛えるのは、並大抵の努力では難しい。アイドル養成所で学べば最低でも半年は掛かるカリキュラムを、アイは一月足らずで制覇したことになる。「フン、私だってやればこれくらいは出来るよ！」

「やる気を出すのは結構だがな……星野アイと金城レナは多分会うことの方が少ないぞ？」

社長の言葉にアイは首を傾げ、私は軽く溜息を吐く。

「えっ、なんで？ 社長私言ったよね私と玲奈をいつか一緒に踊らせるって」

「わかったわかったいつか言って言っただろ揺らすなバカアイドル」

社長の両肩を掴んで振り子のごとく揺らすアイを宥めつつ、優しく抱き留めて背中を数度優しく擦る。

（というか、俺をアイドルにするのまだ諦めてないのかこの人。強情だな……）

「私は玲奈と一緒に良いの！ 玲奈からもなにか言ってよ！」

彼女は子供のように駄々をこねて、そこで俺を初めて見上げた。

瞳の中の星は何時になく揺れ、不安に瞬いて……俺は少し正直になることを、決めた。

「……アイ、よく聞いて。人には向き不向きがある。それは人が天に与えられた才能が別の方向を向いているから。アイにはアイドルの才能がある。この国で一番のアイドルになれる才能が。私には

ファッションモデルの才能がある。この国で……一番のファッションモデルになれる才能が」

どの口が、とさえつつも、言葉は止まらない。

「勿論ファッションモデルがアイドルをやれない訳じゃないし、その逆も同じ。だけど、それは本来持っている才能を殺すことになる。今のままだと、どちらかに合わせたら、どちらかが不幸になる」

「だから、諦めろって言うの……？」

「勿論、いつまでもじゃない。もし、アイが日本一のアイドルになったら、私を特別ゲストとして呼んで欲しいな」

それは、互いにとつての約束であり、目標であり、決意。

「本当に？ 約束する？」

「勿論さ」

「絶対だからね？」

「分かってる」

アイを抱き締めるのをやめて、正面から向き合う。

彼女の輝きは、元に戻っていた。

「なら、私頑張るよ、アイドル！」

「うん。……そうだ、私が『B小町』の宣伝をするのはどうでしょうか？」

俺としても、アイをただの地下アイドルで終わらせるつもりなど毛頭無いので、サポートできる所は全力でサポートしていく心算だった。だからこそその提案だったのだが、社長の表情は芳しくなかった。「いや、このタイミングで、金城レナがアイをゴリ押すのは反発が強い。身内鼻屑に思われてしまうからな。アイとレナはあくまでも知人であって、それ以上の存在ではない……そういうことにしてデビューする。良いな？」

「ええー!? 身内鼻屑したっていいじゃん？」

「バカ言え。政治家やら財閥やらで世間様から一番嫌われるのが身内人事だ。万一炎上なんてしたら、事態は完全に俺たちのコントロールを離れる。期待の新人を共倒れさせるバカが居るかよ。悪いがこれは経営判断だ。どうにもならん」

どうしようもなくなって、自ら悪役を買って出てくれた社長には、頭が下がるばかりだった。

自省と予想、それと魔改造

突然ではあるが、俺も人間である以上、どうしようもなく気分が悪くなることもある。

例えば、失意に沈んだ友人を説得する為とはいえ、口に出すことから鳥澁がましいイキった発言をしてしまった時、とか。

（何が日本一のファッションモデルだよ……英雄王スベックに胡座を搔いてる俺と、ただの人間のアイとでは、その努力の量も密度も、天と地ほどの差がある。……情けない男だな）

この才能はあくまでも外付けの物だ。断じて俺という個人が持つものではない。

「どうしようもない……そう、どうしようもないんだ。本当に」

別に降って湧いた才能を喜んで捨てられるほど禁欲的ではない。俺はそこまで聖人ではない。

だが悪人では無いからこそ、本気で動けば世界征服すら容易くできてしまうであろうこの体の全てを十全に扱おうとも思えない。

……うんまあ、ぶっちゃけ世界征服くらい簡単にできる。

主要都市にエヌマをぶっ放して核ミサイルサイロを吹っ飛ばせばアメリカは簡単に沈む。中国も同様、東西の格差が酷い分更に簡単。これでサプライチェーンの3割近くは破壊できる。後はもう消化試合だ。

黄金律で無尽蔵に増やした金を使ってもいい。個人事業主の敵が嗅ぎつける前に、海外FXで1000倍近いハイレバを掛けてやれば、元手10万円からでも4日足らずで億を狙える。これを一週間続けければ17億円、2週間続けければ260兆円まで到達できる。これでパナマにペーパーカンパニーを建てて世界時価総額ランキングに乗っている会社の株式を7割取得して敵対的買収を掛ける。この金額なら上から10社までなら食える。

そうしたら議決権を盾にアドバイザーとして事業拡大とM&Aを推し進めていけば、やがて世界経済を手中に収めることができる。これもある種の世界征服と言えるだろう。

だが、正直言つて、俺は世界征服というものにそこまでの価値を見出していない。

もし世界を征服したとして、それをどうするのか？

確かに俺は世界を統べることが出来る。人々を富ませ、国を豊かにすることが出来る。だがそれは、俺という一個人の力に極端に頼り切った偽りの世界だ。

俺なら出来る。しかし、その後は？ 一度舵取りに失敗すれば坂を転げ落ちるかのように崩壊する……そんな世界を作るわけには行かない。

加えて、経済ではなく、武力で世界を支配するにしても、俺は決して一人ではない。

アイがいる。斎藤社長がいる。施設の職員がいる、仲間たちがいる。

彼らを守りながら国家と正面から衝突したり、敵対勢力を排除するのは難しい。彼らを切り捨てればずっと簡単になるが、それは俺が俺という存在であるが故に許されない。

……それはさておいて。

今この瞬間を以て、金城玲奈かなしろ ねなという存在は世界に解き放たれた。

あらゆる思惑、あらゆる奸計が俺に、あるいは俺の大切な人達に向かうことになるだろう。それを事前に察知し、注意を逸らし、その隙に根源を断つ。

それを達成するためには、今のままでは権力も資金力も足りない。芸能事務所に所属し、確定申告による査察かなしろが入る以上、法律に沿った合法的な手段で莫大な金を得ることは難しい。

……なので、ここは英霊ギルガメッシュとしての力に全力で乗っからせてもらおう。

多摩川の河川敷、視線避けと光学迷彩の宝具で監視衛星と監視カメラから身を隠しつつ、王の財宝のゲートを開く。

巨大な波紋の中から現れたのは、古代インドの叙事詩に登場する神々の乗り物である天翔る王の御座……

を、魔改造したものである。

ぶつちやけヴィマーナ君、凄い凄いわれてる割には欠陥が多いのである。

宝具化されていたとはいえ現代の戦闘機にすら負ける格闘戦性能の低さと、誘導武装の貧弱さ、光波妨害技術の不足、あと趣味の悪い金ピカ色等々……

これらを何とかすべく、同じく王の財室内に収蔵されていた「光の船」と各種結界宝具、防御防具、電波吸収塗料、現代の火器その他諸々で機能を補い、一つに纏め上げたものとなっている。

その結果として全長25m程度まで大型化し、戦闘機染みた真つ平らな外観に変化したのが、そのスペックは凶悪の一言に尽きる。

F-22に搭載されている塗料より数世代先の技術を持つ電波吸収塗料を使用した結果、ステルス機用の機体設計をしていないにも関わらず素のレーダー^R反射断面積^SはF-35と同等のレベルに達し、表面に展開された電磁波屈折結界によってレーダー波を後方に流すことでほぼ完全な電波に対するステルス性能を獲得している。

そして、主機関を光の船に搭載された「ブラウン・ドライブ」に変更することで、宇宙空間での活動及び超光速機動能力を獲得している。これに伴って操縦席の後部にはエアロックが設置され、それらバイタルパートは電離放射線を防ぐ結界を二重にした上で独立稼働させることで冗長性を確保している。

「ブラウン・ドライブ」の他に、大気圏内ではジェットエンジン双発による通常動力での駆動を可能とし、この状態でもアフターバーン^{ハイパークルーズ}の最高速度はマッハ3に達し、超音速巡航能力を備えている。

極めつけには機体の各種開口部を閉じ、主機関をヴィマーナ本来の太陽水晶とする事で、廃熱を極限まで抑えた熱隠蔽形態^{サーマルステルスモード}へと変形することが可能だ。

……まあやりすぎた感は否めないが、無いよりはあったほうがマシだろう。

ヴィマーナに乗り込んで熱隠蔽形態に変更、同時に光学及び電波迷彩を起動し、河川敷に埋め込んだGPS受信機の座標をウェイポイントとして記録する。

物理法則から解放されたヴィマーナは静かに上昇し、上空2000mの地点でVTOLをオフにして、雲を壊さないように注意しながら対流圏を抜け、成層圏からは熱隠蔽を解除してブラウン・ドライブでぐんぐんと加速していく。

念の為に宇宙服を着用し、熱圏に入った。

「宇宙かぁ……」

この目で宇宙から地球を見るのは、前世今世通して初めてのことで、人並みに感動などしてみる。

速度は時速10万キロに到達し、ものの1分で国際宇宙ステーションの高度を超え、10分で静止軌道を超えた。

宇宙空間での自身の位置を知るためには、電波を利用することが求められる。しかし、当然ながら俺にそんなコネはない。どこかのレーダーをハッキングしてヴィマーナに向け続けなければならないのだが、そんなことをしたら即バレする。

結局、頼ったのはGPS衛星だった。

とは言っても、GPS衛星は地球に向けて電波を発射しているので、静止軌道以遠の座標特定には使えない。なので、俺から見て地球の裏側にいるGPS衛星から溢れた電波を拾うことで、電波航法を成立させている。

(軌道速度合わせ、1795、1797……1800)

「……着いた」

万感の思いを込めて、そう呟く。

多摩川の河川敷を出発してから1時間。地球との相対距離、およそ10万2000キロの超高軌道……ここが俺の目的地だ。

堅き決心、それと抑止力

宇宙服をしつかり着用していることを確認して、エアロックを開放する。

エアロックの取っ手と宇宙服の腰をケーブルで繋いでおく……ヴィマーナが展開するフィールド内であれば、別に生身で活動したつて問題無いのだが、念の為だ。

ゲート・オブ・バビロン
「王の財宝……起動」

俺の声に応えて、ヴィマーナを喚んだ時よりも遥かに大きい波紋が現れる。その中から出てきたのは、超大型戦略級偵察衛星……ステツドファスト。

重量2万トン超え、もはや衛星というより宇宙戦艦とでも言うべきこのステツドファストだが、主な機能としては2つある。

1つは高度約10万キロの遠軌道からでも軍事偵察衛星並の解像度での撮影を可能とする高精度光学系。

そしてもう1つ。

「大聖杯、およびヘルメスMk-4……起動」

第十世代量子コンピューターたるヘルメスMk-4と、それを下支えする動力炉。量子コンピューターであるヘルメスは本来なら駆動に魔力を必要としないが……

（宇宙には無尽蔵に水素があるわけじゃないからな。核融合炉を使うにしても限界がある）

星間物質から供給できる水素には限りがある。木星や太陽から水素を汲み上げるのだってタダじゃないし、第一完全に自動化できない。

故にこそその超抜級の魔力炉心、そして魔力を集める魔術礼装は、宝石剣ゼルレッチの能力を元にした……平行世界からほぼ無限の魔力を供給するもの。エンタルピーとしては有意に減っているが、それはそれとしてこの世界単体で見れば永久機関……という訳のわからない状況だが、活用しない手はない。

礼装のコアをステッドファストに差し込み、呼び水となる魔力を叩き込むと、ステッドファストの各部から淡い光が溢れ、監視形態へと変形していく。

これで起動は完了した。後は地球に戻るだけ……なのだが。

「……まあ、そう上手く行く訳もない、か」

背後から飛来した数多の剣。それを防御宝具で防ぎきり、呆れともつかぬ言葉を零す。

「やっぱり、抑止力が出張ってきたな」

そもそもこの世界、微弱なりともマナが存在している。

存在してなければ俺自身の魔力だけで王の財宝を千門展開し、それらの魔術礼装をすべて同時起動できるわけがない。千門は以前試しにやってみた数値だ。

そして、マナがこの世界に存在するからこそ、星と人類の絶滅回避の祈りたる抑止力がこちらに干渉してくる事は、十分に予想できていた。

……しかし、妙だ。

抑止力による介入は、通常なら介入対象の周りにいる人物を後押ししたりとか……そういう、僅かながらの後押しによって達成される。それがいきなり抑止の守護者を派遣してくるなんて……

(……が、なったものは仕方ないか)

現実に守護者が現れたというのであれば、対峙する他ない。

あいにく戦いなぞやったこともないが、王の財宝で防御をカチカチに固めればタイマン一対一なら問題ないだろう……

そんな考えは、振り返ると同時に霧散する。

赤い外套に身を包んだ錬鉄の英雄、それはいい。あの剣の雨の時点で予想できていた。

……しかし、もう一人。

桃色のグラデーションが毛先にかけて掛かった金髪と、赤い瞳。

白を基調にしたドレスと、傍らに携えた剣。

彼女は、彼女こそは……

「地球最強の原型アーキタイプ・アース……!?!」

だがどうしてアレが出てくる？ 死徒狩りやらなんやらで入ってるんじゃないのか……そう言おうとして、思い至る。

この世界はマナが薄い。Fate世界に比べれば死徒も弱く、死徒狩りの任なぞ星の最強種候補からすれば赤子の手を捻るようなものだろう。

……それに加えて。

「あーっ！ そうだよなあ！ 直死の魔眼の効力も弱まってるんだから月姫起きねえじゃんクソが！」

おまけに俺という存在が出てこれる時点で少なからずこの世界はアラヤに寄っている。故にこそ、ここに於いて現れるのは真祖の姫。無垢な箱入り娘でありながら、この世界において最強の存在である。

「その船は、人から生まれ、而して人の尺度に留まらず、星を滅ぼしうる物……私が呼ばれるとは、驚きましたよ、黄金の女王」

「星の触覚が、一体何の御用ですかね、真祖の姫君。癩に障ったんなら取り外すんで、とつとと帰ってくれませんか？」

声が届く。魔力の放出はなされず、戦闘態勢にはならないと判断して、多少体の力を抜いた状態で会話に応じる。

「それは不可能というものです。消極的な介入であれば、我々は容認しました。……しかし、貴女は直接的な力を振るえる状態に付けた。または、その決意をした。それはもう、抑止力の容認度を超えているのです」

「……ここですべて手を引けば、貴女は俺を追わないか？」

俺の間に、彼女は静かに首を振る。

「どちらにせよ、です。貴女が力を振るう振るわないに関わらず、その決断をした時点で、結末は決まっています」

それに、と彼女は続ける。

「貴女が力を振るうのであれば……貴女ではなく、貴女の大切な人が犠牲になるかもしれませんよ？」

……言ったな？ オレに向けて、その言葉を。

「もし、俺の友に手を出すというのなら……たかが石ころ一つ、この乖離剣にて、諸共に砕くまで。凶に乗るなよ、アーキタイプ・アース！」

俺の返答を受けて、彼女は苦笑と共に剣を抜き、外套の男は黒白の陰陽剣をその手に握る。

「……でしようね。貴女というヒトは、そういう性質であるが故に、あの種読みやすい」

何を……と一瞬考えかけて、今はその時ではないと強制的に振り払い、両手に宝剣を装備し、王の財宝から防御防具を複数展開する。

「交渉は決裂です。行きますよ、錬鉄の英雄」

「……チツ！」

地球のはるか上、静止軌道から3倍以上離れた宇宙空間で、1つの戦端が開かれた。

※初戦闘です

「ゲート・オブ・バビロン ケントウリア・フォーメーション王の財宝、百門展開形態！」

迫りくる剣の雨を、宝物庫から先端だけ出した魔杖で迎撃する。

それと同時に錬鉄の英雄に向けて突っ込み、まずは1合、続けて2合と剣を合わせる。予想外の不意打ちは防御宝具で強引に耐え、まずは彼の剣を覚えることに注力する。

「あら、私は仲間外れですか？」

「んな訳無いでしょ……！」

アーキタイプ・アースには王の財宝を10門向けて、戦車砲のプレゼントだ。

「あらあら……！」

「撃^てエっ！」

発射ガスが吹き上がり、装弾筒付翼安定徹甲弾APFSDSがマツハ5の高速で少女を貫くべく飛翔する……が、着弾する前に急激に威力を減じられ、やがてチリのように消滅した。

（マール・ファンタズム空想具現化……厄介な！）

思わず歯噛みする。思うがままに自然現象を書き換える空想具現化は、星のバックアップを受けている以上生半可な攻撃は通さない。これ以上となると155mm榴弾砲を使うしかないが、それだと威力を一点に集中できない。

『かぜよ』

空想具現化が叩きつけられ、さしもの防御宝具と言えどもミシリと鈍い音を立てた。

「ヴァジュラー！」

インド神話に連なるお手軽攻撃兵装——具体的には所有者の魔力に関係なくB+のダメージ数値を出す——を開放し、アーキタイプ・アースとの距離を取る。

「陣形変更、マニフルス・フォーメーション一二百門展開形態！」

錬鉄の英雄に百門、アーキタイプ・アースに百門。アーキタイプ・アースには近代兵装の他に魔術礼装も混ぜて、より多角的に攻める。

『ひかりよ』

彼女の攻撃を魔術礼装を使って迎撃し、こちらは戦車砲で攻める。
……硬直状態。あちらは問題ない。

「……問題はこつちか」

相対するは赤き外套、抑止の守護者たる錬鉄エミヤシロウの英雄。

……要するにギルガメッシュと相性最悪な彼である以上、俺の背中には冷や汗が伝いっぱなしだ。

(UBWを使われたら、こつちも本気を出さないと削り殺される……かと言って星のバックアップを受けている以上、全ての能力でこちらを上回っている。投影と真作の強度差で競り勝ってはいるが、それもいつまで持つか……)

ジリ貧、という言葉が頭を過るよぎ。別に殺すだけなら簡単だ。一万門ぐらい展開して飽和攻撃で滅殺すればいい……が、それをしても次の抑止の守護者が送られてくるだけだ。宝物だって無限に近いが無限ではない。いつかは必ず底をつくし、アイ達に累が及ばないかも心配だ。

迫る剣雨を撃ち落とし、彼と双剣で切り結ぶ。

怪訝そうな表情は瞬く間に消え、どこか感心したような声音で彼は呟いた。

「私の剣を……なるほど、その目は飾りというわけではなさそうだ」

「黙ってるシニカルボーイ、足元がお留守……!?!」

下から王の財宝を撃ち出そうとすると、どこからともなく飛来した剣が射出口を破壊し……前ツ!

「チー！」

音速で迫りくる赤原フルンディング猟犬を体を倒すことで躲し、彼の蹴りは甘んじて受け入れる。

「だがまだまだだ。経験値が全く以て不足している。大人しく斬られた方が身の為だと思うがね」

「ご丁寧なご教授どうも……ってか、アンタ割と喋るんだな。守護者つてもつところ……自由意志が無いイメージがあるんだけど」

Fate世界の設定によれば、霊長の守護者として召喚された時点

で自意識は剥奪される。描写的に記憶は残るらしいが……いま普通に喋ったよな？

「今回は出張でね。僅かな縁を辿って来たは良いが、肝心の抑止力も縛り付けが薄い。何ともまあ、キミも変な状態になっているみたいだが……それでも私は人の守護者だ。キミの後ろにあるものが危険である以上、それを放置することはできない」

防御宝具に捉えられた赤原狛犬が鈍い音を立てて押し折れる。

それに注意を向ける事すらせず、彼は話は終わりだと言わんばかりに戦意を滾らせた。

(あー、やっぱりコレが何か分かってる感じか……何で辿られたのか、それとも未来で実際に使用されたか……多分後者かな)

馬鹿なことを。余程ブチギレなければ使わないと決めていたものを使わせるとは……どうやら抑止力は自滅をお望みだったらしい。

「俺だってキレないようにしてるし平和に生きたいと考えてるけどさあ？ やっぱり機械じゃないわけで」

自分のことはどうだっていい。アンガーマネジメント位できなくて日々の理不尽業務を耐え抜けるかよ。煽りには煽り返してやるが煽り耐性自体は高いぞ俺は。

……しかしそれとは別に、自分の大切な人を傷つけられたらムカつくことも殺してやりたいと思うこともあるし、それを抑えられるかどうかとは別の話だ。

自己分析を勘案するに、狙われたのは……アイ、か。

この容姿ゆえに知り合いは数多くいるものの、友人と呼んで差し支えない相手は彼女しかいない。

金髪赤眼の日本人とか普通におかしいだろって。その点、物怖じせず話しかけてくる彼女にはだいぶ助けられた。

その存在は俺の中で大きい。社長や施設の人達も無論大事ではあるが……我を忘れる程に怒るかと言われれば否だ。

(まあ敵を作りそうなタチではあるが……フアンにでも刺されたのか？)

そこで一旦思考を棚上げし、お返しとばかりに向こうから突っ込ん

でくるのを財宝の斉射で押し止める。

「勝利すべき黄金の剣！」

……のを、宝具の真名開放で抜けられた。

王の財宝の欠点その1。確かに宝具の数自体は多いが、英雄王ギルガメツシユはそれらの武具の担い手では無いため真名開放が出来ない。

ノウブル・ファンタズム

宝具とは、物質化した奇跡であり英雄の偉業の象徴、彼らの逸話の再現である。

英雄となる程の人間が築き上げた偉業であるゆえに、当然ながらその力は極めて大きい。

この記述を見て気付いた方もいると思うが、英霊ギルガメツシユはあくまでも——宝具というカテゴリに限れば——所有するのは後の時代の英霊に渡る前の原初宝具であり、後の英霊が築いた伝説の担い手ではない。

つまりギルガメツシユはいくら宝具を持っていようが、その真価を引き出すための真名開放を出来ないのだ。

普通なら欠点にならないが、こと無限の剣製相手だと話が変わってくる。

戦闘技術では剣に宿る使い手の経験ごと複製する無限の剣製が有利、同じ宝具を使うならば真名開放出来る無限の剣製が有利、固有結界を展開すれば結界内に宝具が存在する無限の剣製が武器を取り出す速度で有利。

……改めて見るとガンメタ決められてるなあ。とはいえ、付け入る隙が無い訳ではない。

取り出したるはゲイ・ボルグの原典、王の財宝による宝具を強化する宝具に加え、ルーン転写の宝具で必中の呪いを付与する。

——投擲は人類の歴史において最初の武器として位置づけられる。他の霊長類に比して広い肩の可動範囲によって、ヒトは物を高速かつ正確に投げることを可能とした。

弾は地に落ちていいる石でいい。ローコストハイリターンな遠距離攻撃手段を獲得したところ、人間を霊長に押し上げた最大の要

因。

故にこそ選択したのは投槍。狙いはルーンが補正する。俺はただ万力を込めて、この一撃を解き放つのみ！

「この槍は呪いの一条……吹っ飛べ！ 疑似対軍宝具、数多穿つ轟きの槍！」

腕を振り抜く。瞬きの間に極超音速領域まで加速した槍は、刻まれた呪いの効果に従って分裂し、必中する。

「全投影、連続層写！」

対する彼は物量で迎え撃つ。投影宝具の雨あられが光の航跡を描いてゲイボルグの棘を破壊していく。

30の棘に対し200の剣。魔力を失い、勢いを殺された魔槍は俺の求めに応じて手の中に舞い戻る。

壊れた剣の破片の向こう側で、彼が携えるはかの王の剣。人々の願いを束ねる最強の幻想、星の聖剣。

ならばこちらは、選定の剣で迎え撃つ。

王の財宝から原罪を呼び出す。……が、これでは足りない。今できるのは、足して勝つこと——！

「この光は、遙か届かぬ王の剣……」

「溢れるは光、虹の極光……是なるは螺旋虹霓！」

単純な威力比較をするならば、原罪の出力では約束された勝利の剣を受けきれない。抑止力のバックアップによる出力差もあるが、なにより俺は王ではない。選定の剣に認められていない以上、武器としてのランクが落ちてしまう。

合わせるのは原罪、勝利すべき黄金の剣、虹霓剣。音に聞こえし3振りを一本に束ねたこの剣、受けれる物なら受けてみる！

「疑似真名開放……無窮に輝く虹の剣ッ!!」

「……永久に遙か黄金の剣！」

僅かな驚愕を押し殺し、彼の剣が振り抜かれ、俺の剣が振り上げられた。

エクスカリバーが魔力を光に変換するなら、カレドヴルフは魔力を虹に変換する。

対を成す……或いは血を分けた双子の如き性質を持つ2つの光は、その中間点で互いを掻き消すべく喰らい合う。

「おおおおおっ!!」

「るあああああつ!!」

なりふり構わずに裂帛の気合を上げて押し込む。体を駆け巡る魔力を掻き集め、ただ一点、この一合を制することにのみ注力する。

「持ってくれよ! 界王拳、3倍だあああつ!!」

宝物庫から取り出した令呪によるブースト。バックアップとしての純粋な魔力源を、盛大に聖剣へと叩き込む。

「何だど!? ここに来て、まだ……!」

虹が光を食い破る。衝突点を急速に後退させられ、焦った彼も魔力を聖剣に注ぎ込み……そこで、限界が来た。

パキン、と澄んだ音を立ててエクスカリバーが割れる。光の線が薄くなり、慌てて刀身を振り抜いて彼から軌道を逸らす。

「——何と」

それでも尚噴出する虹の勢いは収まらず、丁度振り抜かれた方向にいたアーキタイプ・アースに掠ると、余波だけでその体勢を大きく崩した。

威力はほぼ同等、故に勝敗を分けたのは……投影品と真作との強度差。

(今だ!)

互いに消耗はしているが、バックアップの差で彼の方が先に復帰する。攻め込むなら今しかない。

「この……!」

アーキタイプ・アースが無理矢理にでも横槍を入れるべく王の財宝の包囲を抜ける。

「少し力を貸してくれ……乖離剣ツ!」

ここまで頑なに乖離剣の使用を渋ったのは、偏ひとえに乖離剣が生み出す空間振動によって王の財宝が使用不可能になるから……それに尽きる。

防御宝具の使えない状況で抑止力×2を相手するのは危険すぎる。

故に彼を……剣を使った遠距離攻撃ができる彼を無力化乃至ないしそれに近い状態まで持つていかなければ、乖離剣は使用できなかつた。

なにも最大出力で放つ必要はない。ほんの一瞬足を止めさえすれば、王の財宝による飽和攻撃が可能になる。

乖離剣を出力10%で起動。剣から解き放たれた空間圧流がアーキタイプ・アースを直撃し、その場に押し留める。

「待ちなさい！」

「誰が待つかバアアカ！」

王の財宝による斉射でアーキタイプ・アースを封殺する。

そして宝物庫から取り出すのは……契約阻害の短剣。

「何を……!？」

「オラ悪徳抑ブラッククソ野郎！ 後始末に代理人を派遣してんじやねえ！ テメエが来やがれええええつ!!」

振り下ろした短剣は彼の胸を貫き……肉体を破壊することなく、抑止の守護者としての契約を阻害した。

一瞬、時が静止する。

乾いた音を立てて、彼の体から剥がれ落ちるように青色の炎が溢れ出し……一点に収束して球体を作り出す。

「霊長の抑止力……見るのは初めてだな」

何を望む？

声が届く。全人類の無意識たるアラヤは、発声すらせずしてこちらの願望を問う。

「取り敢えず、俺達にはもう関わるなつてのが一つ。んで、交換条件として……ステッドファストに搭載されている切り札に、出力制限をかける。それでどうだ？」

不足。衛星兵器の完全なる撤去を望む。

「あのなあ？ 俺はお前らにお願いしてるんじゃない。妥協してやるって言うてんだ」

王の財宝から門を開く。地球を破壊できる兵器など山程ある。ステッドファストに搭載したものは、飽くまでもその一つに過ぎない。むしろそれよりも凶悪な品々が、人類という種族の悪性の極限が、こ

の宝物庫には詰まっている。

「ここでお前が要求を飲めば、俺はこれ以上を出さない。それで互いに手打ちにしよう」

アラヤは黙りこくり、アーキタイプ・アースは何処か恐怖を滲ませたような表情を俺に向ける。

「貴女は……どれ程の覚悟と、底無しの意味を……」

「そうだな。敢えて言うならば……人間を舐め過ぎだ。星の精霊」

王の財宝の展開をすべて解除。戦闘態勢を解くと、彼らも続けて魔力の放出を収める。

「炎、機械、武器、奴隷、戦争……己の快と言う目的を達成するためなら何でもやる……それがホモ・サピエンス・サピエンスという生き物の本質だ。善も悪も問わず、な」

「ならば、貴女は人の裁定者足り得る、と？」

「馬鹿を言うな。人間の現在行為に善と悪を問うのは無価値だ。全ては結果に於いて後世が判断する。俺は人に善を為せと奨励する心算はないよ」

人に裁定を下せると思うほどに、俺は思い上がっている訳ではない。

アーキタイプ・アースは考え込み、代わりに彼が口を開く。

「二つ聞きたい。君にとって、正義とは何だ？」

エミヤシロウの、正義の味方であることを求めた彼の問いに、真正面から立ち向かう。

「個人にとつての正義と社会正義とは求められるものが違う。故に、正確にその「正義」に沿う回答はし兼ねるが……俺個人で言うならば、今俺が居る周りの人を幸せにすること。それが俺の掲げる正義だ」

「ただ一人の為の正義の味方、か。それだけの力を持っていながら……」

「よしんば俺がそう決意したとしても、俺が救える万人は、あくまでも俺の認識範疇内の人に過ぎない。生きとし生ける衆生を救済するには、いくら俺であつても力不足だ。俺は神じゃない。現在、過去、未

来……俺は世界を背負えないよ」

ヒトを仮に救済することは出来る。尽きせぬ黄金で心を癒やし、贅なる食で体を癒やすことは出来る。だがそれは、あくまでも仮初めの物に過ぎない。それでは全く意味がない。

仮の救済はヒトの心を腐らせる。愛玩動物のように扱うのは、俺の本意ではなかった。

「ある意味では慈悲であり、ある意味では傲慢、ですね」

少女が嘯く。痛い所を突かれて、俺の表情が僅かに歪む。

「笑ってくれて結構。これが俺だ。自分でもどうしようもない程に矛盾している」

「キミは人間をどう思う。キミは人間に何を求める」

「……初めは、関わるつもりもなかった。ただ日々を安寧に暮らせれば、それでいいと思っていた」

転生したと自覚したとき、俺はギルガメッシュの能力を把握しても、特に自分から何かをしようとはしなかった。

この力を行使することによって生じるリターンと責任^{リスク}、それらを天秤にかけて、後者を取っただけだった。

だが……アイに出会った。

「友が居る。初めは興味だった。だが見通した未来は……決して祝福できるような道のりではなかった。危なっかしくて見てられない。放つといたらずに奈落へと転げ落ちて行くようなやつだから、手を取って……今度は俺が引き摺り込まれた」

希薄なイメージだった。誰が、何が因果律の確立が弱い故に靄がかかったようにしか見えなかったが、この少女が悲劇的な結末をたどることは把握できた。

……それで彼女はアイドル、俺はファッションモデルなのだから、世の中、本当にどうなるか分からない。

お前は守護者に成れる。金城玲奈。

アラヤが手を伸ばす。分岐した契約が俺の体の中に入り込み……俺はそれを、笑って拒絶した。

「俺は確かにそう成れる。だけど残念ながらタダ働きは嫌いだね。も

し後始末に駆り出されて、うっかりそいつが魅力的だったら——世界、壊しちゃうかもしれないぜ？」

アラヤは手を引つ込める。沈黙を破ったのは、アーキタイプ・アースだった。

「我ら地球意思は、金城玲奈を新たなる隣人として認めます。願わくば、その力を善き方向に用いるよう」

「善き方向ってのが難しいが……まあ、努力はするよ」

握手を交わす。これで第1関門は達成した。

「それで、霊長の意思はどうするのかね？」

彼は思わせ振りの視線を頭上の球体に向ける。

お前は抑止力を退けて、何を望む。

「一先ずは、アイと一緒に笑って暮らせる世界かなあ。特殊兵装だつて、本当に保険なんだ。使いたくないのは本当さ」

……であれば、是

アラヤも、彼も、剣の破片も……全てが溶け消えるように消失する。

(……何とかなつた、か)

一度深く息を吸って、大きく、溜息を吐く。

抑止力に目を付けられた時は、本当にどうなることかと思つたが……切り抜けることには成功した。

「金城玲奈、これを」

アーキタイプ・アースが何かを放り投げる仕草をして、直線を描いて俺の手の中に収まる。

「虹の……宝石？」

極彩色の輝きを放つ丸い宝石が埋め込まれたネックレス……それが、彼女が俺に渡したものの正体だった。

「通信礼装です。大気中の魔力を収束してエネルギー源にするので、充電は不要です。個人的な贈り物は初めてで、拙つたないとは思いますが……」

何処か気恥ずかしげに、チラチラとこちらを見る彼女を見ては、邪険にもできず……

「綺麗な贈り物ですよ。ありがとう」

「嬉しい。……そちらが素なのかしら？」

チエーンを解いて首に付けると、彼女は嬉しそうに両手を合わせた。

「素、というかキャラ付けと言うか……この姿で男言葉を使うのは、違和感が大きいですからね」

客観的に見て美の精髓が如き容姿をしていると言うのに、口から出てくるのが野郎言葉というのでは余りに情けない。

丁寧な口調というのは肩が凝るが、この体のイメージにはそれが一番合っている。

「先程の口調も、雄々しくて素敵ですよ？」

「それは好みの問題ですね。……けどまあ、嬉しいよ」

お世辞と受け取って、リップサービスを返しておく。

「うふふ。……それでは、また会いましょう」

彼女の体が崩れて消える。恐らく星に戻ったのだろう。

「っはあああ……疲れました」

誰も居なくなったことを確認して、溜息と共に愚痴とも付かぬ言葉を吐き出した。